

# 『松浦宮物語』における長安の景観

郭 雪 妮

## 1. はじめに

日本の平安時代に起きた保元の乱より平治の乱を経て、京都では新たに勃興した武士階級が長く続いた政争の決着に決定的な役割を果たし始めていた。そして、源平の合戦の際、平清盛が東大寺を焼き打ちするに及び、貴族たちは古代国家の終焉を意識し始め、乱世の世に対し悲嘆の情を吐露するようになった。彼らのそうした感情は、唐土の政治の中にユートピアを見出し、かくして「渡唐物語」が流行することとなった。

『松浦宮物語』は、日本の「渡唐物語」の系譜における集大成であり、『うつほ物語』・『浜中納言物語』といった先行する渡唐物語に見られた中国の地理描写に関する誤りは、おおむね消化されている。また、物語中にはじめて戦乱の描写を取り入れているが、かかる作風は専ら恋情や愛情を描いた王朝物語とは一線を画しており、こうしたことから『松浦宮物語』は軍記物語の嚆矢とも目されている。

一方で、『松浦宮物語』は伝統的な渡唐物語の描くユートピアとしての唐土のイメージを継承している。そこに見られる月界や仙界等の非現実的なロマンあふれる唐土は、想像力溢れる筆致でもって描写され、それは唐都長安の宮殿・関所・防衛施設・郊外などの細部にまで及んでいる。こうしたことから、『松浦宮物語』は日中文化交流史上において独特の価値を持つ古文献となっており、日中比較文学研究の重要文献でもある。

現在、中国の学界における『松浦宮物語』研究は、物語の内容を紹介する文章が1篇見られることを除けば、本格的な研究は未だ着手されていない<sup>[1]</sup>。これに対して、日本では古くは鎌倉時代初期の『無名草子』中に見える藤原俊成女による評論にまで遡ることができ<sup>[2]</sup>、学術研究としては、明治時代から現在に至るまで、注釈書・典籍の翻刻・版本の変遷・事典的な記載・研究書や研究論文など、あらゆる面からの研究が豊富に蓄積されており、これら研究文献の目録もすでに電子化されて、広く研究の利用に供されている<sup>[3]</sup>。

こうした先行研究のうち、本稿が論じようとする『松浦宮物語』と中国との関係という研

究課題に関するものは、池田利夫・塩田公子・広瀬昌子諸氏の研究が代表として挙げられよう。これら諸氏の研究は、おおむね唐土のもつ「ユートピア」としての性質を中心に論じており、そこではいずれも中国全体を虚構の異界像として理解している。

しかしながら、こうした「唐土」全体を研究するという方法は、どうしても表面的かつ抽象的な議論に陥る危険性があることは否めない。そこで、本稿では『松浦宮物語』中に見える長安の地名を手掛かりに、物語に見える長安の宮殿やその周辺施設と中国の典籍との関係を考察する。それにより、鎌倉時代初期における日本の文人が中国の地理的環境を想像する際、史部文献の史書や地理書ではなく、『文選』や『白氏文集』等の集部文献が用いられたことを明らかにしたい。

## 2. 未央宮を主要舞台とする構想

『松浦宮物語』が登場する以前、作品中で唐土が多く描写されたのは『浜松中納言物語』であるが、全6巻のうち巻1において舞台とされたのみである。『松浦宮物語』では、巻1・8から巻3・46までの主要舞台が唐におかれ、主人公の行動範囲も唐都長安の付近に集中している。まず、行論の便宜上、物語中に現れる長安の宮殿と建築物の名称を以下のようにまとめた<sup>[4]</sup>。

- a. 未央の前殿にいで給ひて、この人人をめさる。(巻1・8)
- b. 三十六宮もことにのこるくまなくおもしろきに、夜はことなるめしなくてまゐることなし。(巻1・10)
- c. 禁中の五鳳楼のもとをたづねおはせ。(巻1・14)
- d. 御門、母后ひとつ御こしにのり給ひて、にはかに未央宮をいで給ひぬ。(巻1・18)
- e. 掖庭のせばき身のうへのことをだに。(巻2・23)
- f. 金墉城と云ふ所に閉ぢて、さけをのませてころしつ。(巻2・24)
- g. あすとては、うるはしき儀式をととのへて、前殿にいでおはします。(巻3・46)
- h. 日たかくまかづるを、例のめしとどめて、ありしつり殿(釣殿)のかたぞおはします。(巻3・46)

以上のうち、c「五鳳楼」とf「金墉城」以外の宮殿建築名はいずれも未央宮と関係があり、かつ史書中にも記載があることから、みな実在した建築物であると考えられる。続いて、『松浦宮物語』中の「未央宮」が有する機能を分析して、物語の未央宮に対する表現を探る。

弁少将一行が長安に到着した後の最初の情景は、未央宮前殿において唐の皇帝に謁見する場面である。そのため、未央宮はまず唐朝が外国の使者に接見する儀礼空間として登場する。

未央の前殿にいで給ひて、この人々をめさる。衛府のつかさども、いつくしく陣を引き  
てまもりたてまつるなかをわけて、御前にまいる程、まづ楽のこゑをととのふ。すぐれ  
たるかぎりなれば、くちをしき事なし。（巻1・823頁）

これによると、皇帝が日本の遣唐使に接見した場所は「未央の前殿」となっている。「未央宮」に関しては、『漢書』巻1、高帝紀下に「二月、至長安。蕭何治未央宮，立東闕・北闕・前殿・武庫・大倉。」とあり、『西京雜記』巻1にも「漢高帝七年。蕭相国営未央宮。因龍首山制前殿，建北闕。未央宮周回二十二里九十五歩五尺，街道周回七十里。」とある。前殿は未央宮の中央に位置し、宮中で最も大きく壮麗な最重要の宮殿であり、皇帝即位の儀式や重要な朝会などはみなこの場所で挙行された。

このほか、『松浦宮物語』中に見える唐朝皇帝が弁少将の帰国に際し催した送別の儀式も、やはり未央宮前殿において挙行されている。

あすとは、うるはしき儀式をととのへて、前殿にいでおはします。（巻3・46113頁）

『三輔黄図』巻2にはまた「未央宮周回二十八里，前殿東西五十丈，深十五丈，高三十五丈。前殿曰路寝，見諸侯群臣処也。」とも記されるが、「路寝」の名は『松浦宮物語』中にも、

早朝に、朝堂のうす物の帳をたれて、日ごとにきこしめすこととはてて、露寝にいり給ひては、才ある限りをめしあつめて、文を講じ理を論じて、御門ををしへすすめたまつりたまふ。（巻2・2564頁）

とあり、文中に見える「露寝」はすなわち「路寝」のことを指し、萩谷朴氏が「天子が諸侯に接見するための正殿を言う。正確には「路寝」とすべきである。「路」は「大」の意味に通ずる」と指摘する通りである。このほか、「朝堂」は君主執政の場所であり、『後漢書』巻2、明帝紀に「公卿百官以帝威徳懐遠，祥物顕応，乃並集朝堂，奉觴上壽。」とあることから、『松浦宮物語』に登場する長安の宮殿や建築物の名称は、主に漢長安城内の宮殿関連史料に基づいて命名されており、かつ唐朝が遣唐使を接待するための儀礼空間として設定されていたことが容易に理解できる。

『松浦宮物語』中の未央宮もまた、帝王が居住する寝宮である。物語の中で、燕王が兵変を起こし、幼帝と鄧皇后が長安から逃亡する際、まさにこの未央宮から長安城を出たのであり、それは「御門・母后ひとつ御輿に乗りたまひて、にはかに未央宮を出でたまひぬ」（45

頁)とある通りである。実際、前漢の恵帝から平帝まではみな未央宮に居住していた。このほか、鄧皇后はのちに当時の事を回顧した際、自らを未央宮“掖庭”の人であると述べている。

我おろかにいやしき女の身、いとけなきよはひにして、かたじけなくかしこき君につかうまつことをゆるされ、身にあまる位にそなはりて、十かへりの春秋をおくりしかど、牝鶏のあしたするいましめをおそれて、掖庭のせばき身のうへのことをだに、君のみことのりにあらずして、一事詞をくはへおこなはざりき。(巻2・2357頁)

掖庭は漢代の后妃の居住空間であり、『西都賦』では「後宮則有掖庭椒房，后妃之室」と言い、『漢官儀』では「婕妤以下皆居掖庭」と言い、『三輔黄図』巻3では「掖庭殿。在天子左右，如肘膝」と言っており、これらを見ると定家の「掖庭」に対する理解とその使用法は、まさに史実と符合するものであることがわかる。

物語には、この他に未央宮「釣殿」の名も見える。

日たかくまかづるを、例のめしとどめて、ありし釣殿のかたにぞおはします。さぶらふひとびともいとおほく、よそひことなるかたちすがた、くちをしからねど、御前にてぞいとかひなかりける。(巻3・46113頁)

釣殿は、本来、涼をとる目的で水辺に建てられた回廊式の建築であり、また「釣台」とも呼ばれた。『三輔黄図』巻5には「未央宮有釣台，通霊台」とあり、『松浦宮物語』巻3・43、44の2章には釣殿が登場し、定家は水辺にありそこに影を映すという釣殿特有の効果を利用して、宮中の女官たちが煌びやかな服を着て遊んでいるという華やかな状況を表現している。いずれにせよ、上引史料を見る限り、定家の未央宮に対する理解は、基本的に漢代の宮殿史料を基礎としているという事がわかる。

ここで『松浦宮物語』中において未央宮が担う役割を簡単にまとめておこう。結局のところ、それは第1に外交儀礼の空間、第2に帝王の居住空間、第3に唐朝の議政空間の3つに分けられる。物語の中には、未央宮の建築として露寝・朝堂・掖庭・釣殿等の名が見え、いずれも史書に記載のある建築である。つまり、物語中の長安宮殿建築に対する命名は大変正確なものであり、物語の作者である藤原定家の漢学の素養の深さが窺われる。

次に問題となるのは、『松浦宮物語』巻首において物語の時代を藤原京時代、つまり持統8年(694)から和銅3年(710)の間に設定しているという点である。物語の主人公である

弁少将はこの藤原京時代に生まれ、17歳で遣唐副使に任命されていることから推察すると、彼の渡唐時期は和銅4年（711）から神亀4年（727）の間と考えられる。この期間内、日本は養老元年（717）と天平5年（733）の計2度、遣唐使を派遣しており、それぞれ第8次、第9次の遣唐使団にあたる。当時の唐は玄宗皇帝の治世である。では、唐代長安を舞台として創作された『松浦宮物語』は、いったいなぜ漢長安城の宮殿である「未央宮」を主要宮殿に据えたのであろうか。以下では、日本古典文学作品中の「未央宮」の事例を分析して、『松浦宮物語』が宮殿を「未央宮」と名付けた原因を探る。

### 3. 「長恨歌」の「未央柳」と日本文学の「未央宮」

日本文学において、未央宮の描写が最も早く見られるのは『源氏物語』である。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなくし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。  
(巻1・9)

紫式部はこの中で白居易「長恨歌」の詩句「帰来池苑皆依旧，太液芙蓉未央柳」を引用し、顔立ちは太液池芙蓉のごとく、眉は未央宮の柳のようであるという楊貴妃の美貌に借りて、桐壺更衣の妖艶なさまを際立たせている。このように、「未央宮」の日本文学中の最も早い事例は、白居易「長恨歌」の「未央柳」のイメージと深く関わっている。では、「長恨歌」の「未央柳」のイメージはどのようにして生まれたのだろうか<sup>[5]</sup>。また「未央柳」と「未央宮」との間にはどのような関係があるのだろうか。以下、この点について2つの側面から考察を行う。

第1に、唐代女性の眉の形と「柳葉」との関係、つまり「柳眉」のイメージが生まれたことについてである。唐代女性のあいだで眉書きの風習が流行したのは、帝王や士大夫による偏愛に端を発する。楊慎『丹鉛統録』巻6に「唐明皇令画工画十眉図」とあることから、唐玄宗には独特の「眉癖」があったことがわかる。玄宗は、安史の乱に遭い蜀の地に難を逃れていた時にもかかわらず、画工に「十眉図」を描かせて当時の女性の中で最も流行した眉の形を記録している。唐代の女性の眉の形のパターンは極めて豊富で、唐代の墓葬から出土した陶俑、壁画や棺に描かれた線刻画などからも、そうした状況を窺うことができる。

開元・天宝年間に至ると、徐々に濃く幅広の長眉から細長の眉を好むようになるが、これ



がすなわち「柳葉眉」である<sup>[6]</sup>。柳葉眉は唐代の詩歌でも多く詠まれており、例えば「休憐柳葉双眉翠，却愛桃花兩耳紅」（張祜「愛妾換馬」），「人眉新柳葉，馬色醉桃花」（劉禹錫「同樂天和微之深春之二十首」）などの詩句はその好例であり、とりわけ白居易の「眉欺楊柳葉，裙妒石榴花」（「和春深二十首」）は、柳葉眉の妙を見事に表現している。

このほか、以上で引用した詩句のなかで、詩人たちは「柳眉」のイメージを詠ずるとき、しばしば「桃花」・「石榴花」・「芙蓉」など花のイメージを伴っており、一花一葉に女性美を託している。柳葉眉は唐代を通じて広く支持されていた眉化粧の様式の一つであり、唐詩において「柳眉」のイメージが生まれるのは、開元・天宝年間における女性の審美観の風潮と密接不可分なのである。

第2に、「柳眉」のイメージと未央宮との関係についてである。周知のごとく、「長恨歌」は唐の皇帝を描写しながら実際には「漢皇」に仮託し、「当朝」と称さず「漢家」と称している。この点について、学界では従来「避諱説」・「漢虜対照説」・「用典説」・「諷諭結構説」などの説があるが<sup>[7]</sup>、これらは物語の本文に研究の重点を置いたものではないため、その詳細についてここでは立ち入らない。ただ、「漢を以て唐に代ふ」という態度が唐人の漢武帝時代に対するアイデンティティであり、それを玄宗朝に比せんとする意識に基づいていると理解する点は、筆者も基本的に支持するものである。

「長恨歌」が背景を漢代に設定しているのであれば、漢長安城の宮殿名を用いることは至極当然の事であろう。しかも、楊貴妃を漢長安城の主要宮殿である未央宮の柳を用いて表現していることも、これ以上ない程に適切なものである。

以上で述べたことをまとめると、日本文学における「未央宮」の最も早い事例は、「未央柳」という複合的なイメージを媒体としていたことに気付く。日本文学史上における『源氏物語』の影響力は大きく、後世の文学作品の中にその影響の痕跡を容易に見出すことができるが、「未央柳」というイメージはまさにその象徴である。また、『平家物語』巻6、州俣合戦に「岸の松、汀の柳年経にけりと覚て、木高くなれるに附ても、太液の芙蓉、未央の柳、是に向ふに如何が涙進ざらん。彼南内西宮の昔の跡、今こそ思召知れけれ」とある。「長恨歌」中には、楊貴妃の死後に玄宗が過去を懐かしんで回想に耽っているようすが描写されているが、そこにはこの世のはかなさが浮き彫りにされていた。『平家物語』ではこの故事に基づいて、法皇が再びかつての寝宮を訪れるも、すでにあちこち荒廃して、ただ海岸の松や柳のみが在りし日の姿を偲ばせており、そこで忽然と過去の美しい記憶が蘇って感傷に浸り、思わず哀しみがこみ上げ涙がこぼれたと描写した。このように、「未央柳」のイメージは、作品にもの悲しさと哀愁を添え、感傷的雰囲気を作り出している。

『浜松中納言物語』になると、「未央宮」の描写は少しく異なり、単なる地名として用いら

れはじめる。『浜松中納言物語総索引』によれば、『浜松中納言物語』全体で「未央宮」の語は計10箇所みられるが<sup>[8]</sup>、それらはいずれも8月15日に举行される「月宴」と関係がある。

帰らむことは、九月つごもりと定めらるるに、八月十五日夜は、別れの宴して月をもてあそぶに、つねよりもいみじうことどもととのへて、未央宮といふところは、日本にとりては、冷泉院などといふところのやうなり。（巻1・27）

ここに引用したのは、『浜松中納言物語』全体の中で唯一、未央宮自体について描写している箇所であり、その他の9例はいずれも「未央宮月宴」を回想する形で描かれている。つまり、『浜松中納言物語』では未央宮は特定の意味を持たない単なる地名に過ぎず、ただ日本の冷泉院と対比する形で説明されるのみである。このほか、『浜松中納言物語』中には「楊貴妃」の名も見えており、各種注釈本ではこの物語の「未央宮」の典故を「未央柳」に求めている。『浜松中納言物語』において、初めて「未央柳」というイメージから「未央宮」を抽出し、それを唐朝の主要宮殿に据えたことがわかる。しかも、未央宮の宮殿や建築に対しては特別な描写を行わず、日本の冷泉院をもって想像させており、完全に日本式の「未央宮」を創出しているのである。

このように、日本の地名を用いて唐土の地名に対比させるという手法は、『浜松中納言物語』の中に無数に確認でき<sup>[9]</sup>、「日本中心主義」による描写方法であるとの学者たちの批判が出るほどである<sup>[10]</sup>。これに比して、『松浦宮物語』における未央宮の諸建築に対する詳細な描写は従来の作品には見られなかったもので、このことは少なくとも『松浦宮物語』の作者が日本文学における未央宮描写の伝統を受け継ぎつつも、他方では『漢書』・『晋書』・『文選』といった中国の典籍を吸収し、利用していたことを物語っている<sup>[11]</sup>。

以上に述べたごとく、『松浦宮物語』は唐長安城を舞台としながら、主要宮殿には漢長安城の「未央宮」を据えていた。そこでは、「長恨歌」を利用するという日本文学の伝統的な手法を継承してはいるものの、「長恨歌」中の「漢」が実は「唐」を指すという事情を見落としており、単純に「未央宮」を玄宗と楊貴妃による恋物語の舞台として理解してしまったのであった。実際、『松浦宮物語』の時代の日本には、中国の地理書や地方志文献がすでに伝来しており、当時の公卿の日記などを見ても、日宋貿易によって大量の漢籍や仏典などが日本に伝来していたことが見て取れる。このことから、渡唐物語の作者が遣唐使の入唐時の通過ルートに関する知識を有していたことを理解できる。ただ、実際の状況がこのようであったとしても、物語の作者が中国地理を描写し、想像する際には、依然として『白氏文集』が主要資料として用いられていた。このことは『松浦宮物語』の長安の防衛施設や、その周

辺の地名などの描写の中で、はっきりと見て取ることができる。

#### 4. 「潼関」の命名にみる「長恨歌」の影響

『松浦宮物語』巻1・18から巻2・25までは、唐朝で勃発した「燕王の乱」を舞台とし、遣唐副使たる主人公弁少将が動乱を平定するまでが描写される。「燕王の乱」の主要舞台は唐長安城であるから、物語の中でも当然長安城の防御施設にまで話が及ぶ。

唐長安城は、関中平野中部に位置し、長安城外周の外側の第一の防衛線は、秦嶺山脈・黄土高原・多数の河川等の自然の地形を十分に利用して形成された関所であり、こうした関所は長安の四方に設けられ、その多くは軍事や交通の要衝に築かれていた<sup>[12]</sup>。

ところが、唐長安城にとっての防御上最大の脅威は、むしろ関東方面にあった。唐朝の開国者は主に関隴集団に属したため、彼らは関東の氏族に対し始終警戒心を抱き続けていた<sup>[13]</sup>。事実、唐代中期に勃発した安史の乱や唐代末期の黄巢の乱、唐朝の滅亡などはいずれも関東方面の勢力よりもたらされたものであった。関東方面につながる最重要の関所は函谷関と潼関であり、この2つの関所はそれぞれ『浜松中納言物語』と『松浦宮物語』の中に登場する。

物語中の戦争描写は、まず燕王が胡人の力を借りて潼関を破るところから始まり、幼帝と母后はやむなく難を避けるため蜀の地へと赴く。この部分に登場する地名は「潼関」だけでなく「劍閣」・「蜀山」等、安史の乱と密接に関わる地名がみられる。『松浦宮物語』は多くの面で『浜松中納言物語』を継承しているが、長安周辺の関所の描写においては両者に差異がみられる。すなわち、『浜松中納言物語』では「函谷関」を長安の玄関口とするが、『松浦宮物語』では「潼関」を長安の重要な関所として位置付ける。

まず『浜松中納言物語』開巻で遣唐使一行が長安に入る様子を述べる際、遣唐使の目に映る函谷関をどのような工夫を用いて描写しているのかを見てみよう。

山越え果てぬれば、函谷の関に着き給ひて、日、暮れぬれば、関のもとに泊り給ひぬ。  
「この関は、鳥の声を聞いてなむ開くる」といふことを「しか」と聞いて、御供の人の中にはけたるものありて、「いざこころみむ」とて、夜中ばかりに、鳥の声にしみじう似せて、はるかに鳴き出でたるに、関の人おどろきてその戸を開く。 (巻1・1)

中国史上には函谷関をめぐる多数の故事が生まれたが、孟嘗君の「鶏鳴狗盗」もその一つである<sup>[14]</sup>。上引の部分は孟嘗君の「鶏鳴狗盗」に擬えているが、函谷関の険阻な地形やその



風景は描かれていない。

函谷関は戦国秦の時に置かれ、長安古道にあってその立地が峡谷にあり、かつ極めて險阻で函の様であることからこの名が付けられた。両漢時代、函谷関は移設されたこともあったが、一貫して洛陽から長安に至るための第一関門であり続け、都城長安を防衛する重要な要塞でもあった<sup>[15]</sup>。

一方、『松浦宮物語』では、『浜松中納言物語』とは異なり、「潼関」を長安防衛の要塞と位置付ける。潼関はおおよそ後漢末頃に置かれ、現在の山西省・陝西省・河南省が交わる場所に位置する。後漢末の混乱と三国鼎立による戦乱を経て、潼関は新旧函谷関に替わる長安防衛の重要な関所となった。唐代初期になると、潼関はすでに関東勢力の進攻を防ぐための最重要の砦となり、戦略上極めて重要な意義を有するようになった。

『松浦宮物語』では、文皇帝が崩御し幼帝が即位すると、燕王が帝位を狙って幼帝を欺き、クーデターを起こす。この時、燕王はまさしくこの潼関から長安へと攻め入ったのである。

としもおとなび、よろづの事をみづからおこなひ給ふかたはさこそいへ、いくさのたけもこよなく、はかり事もかしこければ、日にそへてつよりゆくに、つひにかたきのつは物、潼関といふ関をこえぬ。  
(巻1・1845頁)

このような状況下で、鄧皇后は幼帝と共にやむなく長安城から出奔し、難を避けて蜀へと逃れた。唐代における蜀の地は唐朝の戦略上最後方に位置し、重要な食糧供給地であるとともに、皇帝の緊急避難経路でもあった。

長安城が関東方面からの脅威に晒されていた時にあって、南方の蜀への避難は第一の選択肢であった。物語のこの場面では、「燕王」・「借胡人之力」・「破潼関」・「出長安」・「奔蜀避禍」等がキーワードとして注目に値する。これらいくつかの単語を繋げれば、あの「安史の乱」を容易に連想できよう。

唐代中期の天宝14載(755)11月、胡人安祿山は、宰相楊国忠との権力争いを直接の契機として叛旗を翻し、ついに「安史の乱」が勃発した。その年の12月、安祿山は洛陽をすばやく攻め落とすと、翌年1月には「大燕皇帝」を自称した。さらに翌年6月、潼関の守備は安祿山によって破られ、玄宗は一族と一部の大臣と衛兵を率いて蜀へと逃れた。つまり、『松浦宮物語』に描かれる「燕王の乱」の構想は、安祿山が起こした「安史の乱」に着想を得ていたことがわかる。

『松浦宮物語』が「安史の乱」を原型として選んだのは、やはり「長恨歌」からの影響が深く関わっていると思われる。『松浦宮物語』の「幼帝奔蜀」と、「長恨歌」の「玄宗奔蜀」

の情景描写を比較すると、両者の間に影響関係のあることが容易に看取できる。

十月廿日あまりなれば、みねのあらしはげしく吹きはらひて、よもの木の葉もきほひがほなる山の色々、すこしうち時雨れたる雲のたえまの日影さへ、けはひ物さびしきに、御輿のかたびらばかり紛れぬ色に見渡されて、さすがにささげもたる天子のしるしの旗の数々、風にひるがへるも、雨露にいたくしをれて色あひすさまじきを見るかぎり、この道にともなひはてたてまつらむ心ある人はすくなけれど、さて離れ逃げて、身の助からむ事はかたきに、もの思ひわきまへたるたぐひもなし。(巻2・1947頁)

この引用部分では、山風が吹きすさび、落葉が舞い、黄塵が漂うような情景の描写を駆使して、幼帝及び鄧皇后の蜀への逃避行の艱難さを鮮明に描き出している。これを「長恨歌」の「黄埃散漫風蕭索，雲棧縈紆登劍閣。峨嵋山下少人行，旌旗無光日色薄」の部分と比較すると、「黄沙」・「山風」・「薄日」・「旌旗」・「雨霖鈴」などの重要な語彙がほぼ一致していることにすぐに気が付くが、この点について少し補足しておこう。

まず、奔蜀の時期設定についてである。玄宗が蜀へ避難したのは7月であるが、「長恨歌」の描写には秋冬の寂寥感が溢れており、この点は後世しばしば批判を受けてきた。黄永年氏は「玄宗が蜀へ幸し…道中はまさに真夏の頃であった。真夏の風は涼しい時も熱い時もあるが、それを秋風のように寂寞などと称することは絶対に不可能であり、強烈な日差しも秋冬のように薄日であるというような形容は到底できない。」と述べている。「長恨歌」が時候を顧慮せずに「風蕭索」・「日色薄」といった表現を敢えて用いているのは、蜀へと向かう途上にある君臣間の暗澹たる心情を描き出すためであろう<sup>[16]</sup>。

筆者は、この黄氏の観点は極めて首肯に値する指摘であると考えられる。『松浦宮物語』では、幼帝奔蜀の時期を秋冬10月に設定して季節と景物の間の矛盾を解消しているが、これをもって『松浦宮物語』の作者の方が一枚上手だといえるだろうか。また、『松浦宮物語』が奔蜀の時期を10月に設定した理由とは何であろうか。

次に、「時雨淋漓，薄日穿雲」の情景描写について考える。この部分の表現は明らかに「長恨歌」の「行宮見月傷心色，夜雨聞鈴腸断声」に基づいた表現であるが、この点は現行の『松浦宮物語』諸注釈本では指摘されていない。

ここで問題となるのは、『松浦宮物語』が白居易の用いた「夜雨聞鈴」という表現に対して誤解している可能性があるという点である。陳寅恪は「長恨歌」の「夜雨聞鈴」に関して、段安節『楽府雜録』に「雨淋鈴者，因唐明皇駕回至駱谷，聞雨淋銿鈴，因令張野狐撰為曲名。」とあることを指摘している。すなわち、「雨霖鈴」は天宝15載の蜀へ赴く途上に作成

されたもので、「玄宗が蜀から長安に戻る行程の季節は全て冬に当たり、曲中の表現とは合わない」のである<sup>[17]</sup>。

つまり、帰途が冬に当たるとすると、「時雨淋漓」の表現は実際の気候状況と矛盾するのである。となると、『松浦宮物語』が蜀へ奔る時期を秋冬に設定しつつも「雨淋漓」の情景を描写し、かつ「雨淋漓」と「日色薄」が同時に登場しており、東方で陽が昇り西方で雨が降るといふこのような状況は、巴蜀地域の秋冬の気候とは全く合わないものなのである。

いま上述の問題のうち第一の問題の答えが得られた。すなわち、『松浦宮物語』が蜀に奔る時期を10月に設定したのは、おそらく作者が単に「長恨歌」の表現に基づいて詩中の奔蜀の部分でデフォルメして描写した結果であると考えられる。「長恨歌」は本質的には架空の内容を含んだ文学作品であって、「玄宗の蜀への行幸は真夏の時期」という史実には合わないというような見解は、ただ後世の学者たちが判断を下したものに過ぎない。「長恨歌」の表現そのものからは「真夏の時期に当たる」という印象を受け取ることはできず、従って藤原定家が描く蜀周辺の風景も「長恨歌」の表現そのものに対する解釈によって生み出されたものと考えられる。既引の『松浦宮物語』巻2・19に「さすがに捧げ持ちたる天子のしるしの旗の数々、風にひるがへるも、雨露にいたくしをれて、色あひすさまじきを見る限り」とあったが、これは明らかに「長恨歌」の「峨嵋山下少人行、旌旗無光日色薄」という詩句に対する解釈である。

『松浦宮物語』中の「劍閣」・「蜀山」等の地名もやはり「長恨歌」に基づいて表現されたものである。『松浦宮物語』では計3度「劍閣」が描かれるが、今、その各部分を以下に掲出する。

蜀山のはるかに、劍閣のさがしきをたのみて (巻2・1948頁)

劍閣のさがしきみちにむかふべしや (巻2・2356頁)

劍閣のあやふきかけはしにおもむく (巻2・3486頁)

ここに掲げた「劍閣」の登場する3例の用いる形容詞はいずれも大差なく、「険峻（さがしき）」・「険要棧道（さがしきみち）」・「危険（あやふき）」といったものであり、これら以外に、より具体性を持った描写はほとんど見出せない。つまり、定家は「長恨歌」中の「雲棧縈紆登劍閣」の句から「劍閣険要」というイメージを受けたのではあるが、中国の詩歌はそもそも高度に凝縮された言語であって、異国の文人がそれを利用し自由に想像できる範囲というのは、実は相当に限られた狭い範囲なのである。

## 5. おわりに

本稿において、筆者は『松浦宮物語』中に見える中国の地名を整理して、物語が唐長安城を主要舞台としながらも、実際には「未央宮」を主要宮殿としていることを指摘した。そして、先行研究が日本文学における「長恨歌」の伝統的な受容方法を継承し、「長恨歌」の持つ「漢」をもって「唐」を表すという手法を見落とし、直接「未央宮」を玄宗と楊貴妃の恋物語の舞台として理解していたことを明らかにした。本論でも指摘したごとく、『松浦宮物語』が「長恨歌」の情景と表現を借用していることは「燕王破潼関」・「唐帝奔蜀」等の場面においてははっきりと読み取ることができる。

『松浦宮物語』の時代、中国では既に唐から宋へと王朝が替わっており、いわゆる「唐土」は既に一種の幻想となって日本文学の中に吸収されていった。『浜松中納言物語』等の渡唐物語における中国描写が未だ日本独自の影響を脱しきれていないのとは異なり、『松浦宮物語』のそれはより史実に近いものとなっている。また、藤原定家個人についてみれば、その深い漢学の素養によって、『松浦宮物語』中に唐土の地理や風俗を実に正確かつ立体感を持ちながら表現してみせた点は、先行する渡唐物語を遥かに凌駕するものであり、文献と想像とによって、かくも臨場感あふれる唐土像を描き出せたことは驚嘆に値しよう。

### 注

- [1] 於国瑛『異彩紛呈の物語世界』（北京・知識産権出版社、2012年）第4章第3節「幽玄妖艶の力作—松浦宮物語」において『松浦宮物語』の物語の大意が詳細され、一部抄訳も試みられている。
- [2] 『無名草子』46に「定家少将の作りたるとてあまはべめるは、まして、ただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもにはべるなるべし。『松浦の宮』とかやこそ、ひとへに『万葉集』の風情にて、『うつほ』など見る心地して、愚かなる心も及ばぬさまにはべるめれ。」とある。久保木哲夫校注『無名草子』（『新編日本古典文学全集40』、東京・小学館、1999年）257頁を参照。
- [3] 吉海直人「『松浦宮物語』研究文献目録」（<http://www.asahi-net.or.jp/~tu3s-uehr/matura.htm>、2013年6月）。
- [4] 本稿で引用する『松浦宮物語』は、特に注記した場合を除き、一律、萩谷朴校注『松浦宮物語』（東京・角川書店、1984年）に拠った。
- [5] 張哲俊『楊柳の形象—物質的交流と中日古代文学』（北京・人民文学出版社、2011年）は、日中古代文学と楊柳との関係に関する代表的研究であるが、「未央柳」と日中文学との関係についての言及はみられない。
- [6] 胡小麗・趙静「唐代婦女の眉式」（『考古与文物』、1995年第6期）。
- [7] 張中宇「長恨歌「以漢代唐」考略」（『天府新論』、2005年第2期）。
- [8] 池田利夫『浜松中納言物語総索引』（東京・武蔵野書院、1964年）184頁。
- [9] 瀬利さくを「浜松中納言物語に於ける異国性」（『古典研究』9、1941年）。
- [10] 注[1]於国瑛『異彩紛呈の物語世界』参照。

- [11] 萩谷朴氏は人物の命名や官制，地方志などの視点から『松浦宮物語』作者が利用した可能性のある諸文献について詳細に論じている。萩谷朴「松浦宮物語作者とその漢学的素養上・下」を参照。萩谷朴「松浦宮物語作者とその漢学的素養 上」（『国語と国文学』，1941年第8号），「松浦宮物語作者とその漢学的素養 下」（『国語と国文学』1941年第9号），ともに同『松浦宮全注釈』，東京・若草書房，1997年に所収。
- [12] 史念海「関中の歴史軍事地理」（『史念海全集第四卷河山集四』，北京・人民出版社，2013年，1991年初出）113-143頁。
- [13] 陳寅恪『唐代政治史述論稿』（北京・三聯書店，2009年，1942年初出）199頁。
- [14] 『史記』孟嘗君列伝に「夜半至函谷関。秦昭王後悔出孟嘗君，求之已去，即使人馳傳逐之。孟嘗君至関，関法鶏鳴而出客，孟嘗君恐追至，客之居下坐者有能為鶏鳴，而鶏齊鳴，遂發伝出。出如食頃，秦追果至関，已後孟嘗君出，乃還。」とある。（司馬遷撰『史記』北京・中華書局，1962年）
- [15] 史念海「函谷関和新函谷関」（『史念海全集第四卷河山集四』北京・人民出版社，2013年，1991年初出）269-282頁。この中で函谷関と潼関の地理的な位置とその役割について，史念海は現地調査に基づいた精緻な分析を行っている。
- [16] 黄永年「長恨歌新解」（『文史集林』，1985年第4期）。
- [17] 陳寅恪『元白詩箋証稿』（北京・三聯書店，2001年，1950年初出）34-35頁。

#### 引用史料

- (1) 班固撰『漢書』北京・中華書局，1962年
- (2) 何清谷撰『三輔黄図校釈』中国古代都城資料選刊，北京・中華書局，2005年
- (3) 葛洪撰『西京雜記』周天游校注，西安・三秦出版社，1985年
- (4) 范曄撰『後漢書』北京・中華書局，1962年
- (5) 蕭統撰・李善注『文選』上海・上海古籍出版社，1986年
- (6) 楊慎『丹鉛統録』北京・中華書局，1985年
- (7) 紫式部『源氏物語』豊子愷訳，北京・人民文学出版社，1980年
- (8) 松尾聰校注『浜松中納言物語』日本古典文学大系77，東京・岩波書店，1964年
- (9) 萩谷朴校注『松浦宮物語』東京・角川書店，1984年
- (10) 市古貞次校訂『平家物語』新編日本古典文学全集45・46，東京・小学館，1994年

（カク セツニ 陝西師範大学文學院准教授）